

展開のきっかけ

カメの足って何本

社会福祉法人わこう村 和光保育園（千葉県富津市）[4歳児]

<事前の様子> クラスで飼っているカメを怖くて触れない子が何人もいる中、A児はカメを持ちあげることができ、他児にも頼りにされている。自分たちで世話をする気持ちが高まっている。

	子どもの姿	援助(♡) 読み取り(※)
発想	<ul style="list-style-type: none"> カメの世話をする人がわかるようにしたいと考え、A児の発案で世話係は「カメの絵」を描いたバッジを作って、洋服につけることになる。 A児は喜んでバッジ作りを始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ♡ A児の発案を受け止め、他児にも聞いてみる。 ※ A児は自分の提案が他児に認められ、意欲が膨らむ。
表現1	<ul style="list-style-type: none"> A児は最初に①の絵を描く。  <ul style="list-style-type: none"> 足の数を確かめにカメの水槽を見に行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ♡ カメの足の数を聞く。 ※ 想像してカメを描いている。足の数は?と聞かれて、確かめようと水槽まで行く。
表現2	<ul style="list-style-type: none"> 戻ってくると、「2と2で4本だった」と言い、②の絵を描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ※ 聞かれた「足の数」にだけ関心が向けられている。
表現3	<ul style="list-style-type: none"> 隣で描いていたB児のカメの絵は、足が太いことに気付く。  <ul style="list-style-type: none"> もう一度水槽を見に行き、③の絵に描き直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ※ 他児の描いた絵の表現と自分の絵の違いに気付いたことで、再度の観察をし、カメの形状に関心が向けられた。

考察

3つの絵の変化

- ・ 何度も触ったり見たりしていたカメだったが、形についてはこれまで余り意識をせずに、カメ全体を漠然と見て形で意識していたようだ。バッジを作ろうという発想から絵に描くことになり、無意識に捉えていたカメの形について実際に確かめ、意識する機会が生まれた。
- ・ 他児と自分の絵の違いに気付いたことで、再度の観察をし、カメの形状に関心が向けられた。その結果、足の太さを表現するだけでなく、甲羅の模様にも気付いて絵に表わすことができ、関心と学びの質が変化していることがわかる。
- ・ カメの足が左右2と2で合わせて4本であることや、「どこに」「何が」「どのように」についているかにも関心・意識が向けられて、カメを観察する目が変わった。虫の好きなA児はこの経験をきっかけにして、虫の形にも関心が向けられると楽しくなると思うので、観察の目を広げていけるよう支えたい。



ポイント

カメの世話をすることへの思いが「カメの印のバッジ作り」の発想を引き出しています。興味の対象を大切なバッジに表現することが意欲になり、保育者の支援や友達の表現により観察を深め、曖昧であったことが明確に意識されていきます。このA児の言動や表現の変容を把握することで、「カメの特徴を意識して表現する」という「科学する心」が育まれる体験が明らかになっています。